

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	福岡財務支局長
【提出日】	2019年3月29日
【事業年度】	第31期（自 2018年1月1日 至 2018年12月31日）
【会社名】	株式会社ゼネシス
【英訳名】	XENESYS INC.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 長屋 勝
【本店の所在の場所】	佐賀県伊万里市黒川町塩屋字七ツ島5番地91 (2019年3月20日本店所在地東京都江東区亀戸7丁目10番1号が上記のよう に移転しております。)
【電話番号】	0955-20-7570
【事務連絡者氏名】	総務部 北原 潤希
【最寄りの連絡場所】	東京都江東区亀戸7丁目10番1号
【電話番号】	03-6441-2152
【事務連絡者氏名】	総務部 北原 潤希
【縦覧に供する場所】	該当事項なし

(注) 第31期有価証券報告書より、日付の表示を和暦から西暦に変更しております。

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

提出会社の状況

回次		第27期	第28期	第29期	第30期	第31期
決算年月		2014年12月	2015年12月	2016年12月	2017年12月	2018年12月
売上高	(千円)	267,802	140,554	169,561	163,458	55,490
経常損失()	(千円)	188,799	108,042	58,707	125,921	185,779
当期純利益又は当期純損失()	(千円)	190,727	433,039	180,729	126,507	191,802
持分法を適用した場合の投資利益	(千円)	-	-	-	-	-
資本金	(千円)	490,000	100,000	100,000	200,000	200,000
発行済株式総数	(株)	1,301,731	1,301,731	1,301,731	3,475,644	3,475,644
純資産額	(千円)	372,556	61,482	119,246	192,739	936
総資産額	(千円)	558,741	211,921	205,374	203,148	81,520
1株当たり純資産額	(円)	286.20	47.37	91.89	55.52	0.26
1株当たり配当額	(円)	-	-	-	-	-
(内、1株当たり中間配当額)	(円)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
1株当たり当期純利益又は当期純損失()	(円)	146.52	333.20	139.27	49.30	55.24
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	(円)	-	-	-	-	-
自己資本比率	(%)	66.6	29.0	58.1	94.9	1.1
自己資本利益率	(%)	-	-	-	-	-
株価収益率	(倍)	-	-	-	-	-
配当性向	(%)	-	-	-	-	-
営業活動によるキャッシュ・フロー	(千円)	31,449	47,763	38,436	141,634	96,394
投資活動によるキャッシュ・フロー	(千円)	12,957	4,546	7,958	-	8,201
財務活動によるキャッシュ・フロー	(千円)	25,000	94,000	28,000	149,410	55,000
現金及び現金同等物の期末残高	(千円)	8,277	49,967	47,490	55,267	5,671
従業員数	(人)	26	23	17	19	20

- (注) 1 当社は連結財務諸表を作成しておりませんので、連結会計年度に係る主要な経営指標等の推移については記載しておりません。なお、重要な関連会社はありません。
- 2 重要な関連会社がないため持分法を適用した場合の投資利益については記載しておりません。
- 3 売上高には消費税等は含まれておりません。
- 4 潜在株式調整後1株当たり当期純利益について、第27期、第28期、第30期、第31期については1株当たり当期純損失が計上されているため記載しておりません。また、第29期は希薄化効果を有している潜在株式が存在しないため記載しておりません。
- 5 第27期、第28期、第30期、第31期の自己資本利益率については、当期純損失が計上されているため、第29期については、期首自己資本がマイナスのため記載しておりません。
- 6 株価収益率については、当社株式は非上場であり株価が把握できないため記載しておりません。
- 7 従業員数については、就業人員数を表示しております。他社からの出向社員はありません。

2【沿革】

年月	事項
1989年3月	里見公直が100%出資で里見産業㈱を創立、伝統技術と最新のFA化技術を融合させた新酒造システムにより醸造事業を開始（資本金1,200万円）
1991年6月	資本金を2,000万円に増資（株主割当による割当160株）
1992年6月	資本金を3,000万円に増資（株主割当による割当200株）
1993年6月	資本金を4,500万円に増資（株主割当による割当300株）
1994年3月	資本金を5,000万円に増資（株主割当による割当100株）
1994年6月	神戸営業所を開設
1995年4月	資本金を7,000万円に増資（株主割当による割当400株）
1996年5月	資本金を9,000万円に増資（株主割当による割当400株）
1997年4月	資本金を9,900万円に増資（株主割当による割当180株）
1997年9月	U-TECエネルギー事業部創設
1997年10月	U-TEC事業において、地下開発、地熱、温泉開発、海洋開発のメーカーである株式会社利根（東京都目黒区）と全面的業務提携
1998年2月	佐賀大学とOTEC、地熱水発電に関する共同研究契約を調印
1998年7月	佐賀大学と地熱発電に関する共同研究契約を調印
1998年8月	資本金を1億5,000万円に増資（株主割当による割当1,020株）
1999年3月	資本金を1億8,000万円に増資（株主割当による割当600株）
1999年4月	U-TECオフィス佐賀・研究事務所開設
1999年6月	資本金を1億9,800万円に増資（1割無償交付360株）
1999年8月	資本金を2億1,800万円に増資（第三者割当による割当400株）
2000年1月	資本金を2億4,050万円に増資（第三者割当による割当360株）
2000年2月	資本金を2億7,300万円に増資（第三者割当による割当520株）
2000年2月	佐賀大学と専用実施権に関して国有特許実施契約を調印
2000年3月	資本金を4億100万円に増資（第三者割当による割当320株）
2001年1月	東京支店開設
2001年1月	資本金を4億5,000万円に増資（第三者割当による割当49株）
2001年5月	資本金を5億6,100万円に増資（額面普通株式1株を2株に分割）
2001年10月	社名を株式会社ゼネシス（英表記 XENESYS Inc.）に変更
2001年12月	資本金を6億1,050万円に増資（第三者割当による割当66株）
2002年1月	塩山工場完成（山梨県塩山市：現 甲州市）
2002年12月	普通株式1株を10株に分割
2003年3月	資本金を8億6,050万円に増資（第三者割当による割当2,000株）
2003年6月	醸造部門を里見産業㈱（ ）へ営業譲渡
2003年6月	普通株式1株を10株に分割
2003年11月	資本金を9億6,055万円に増資（第三者割当による割当6,670株）
2004年3月	塩山工場において、ASME（米国機械学会）の製造資格であるU Stampを取得
2004年10月	サウジアラビアのリヤドに合弁会社ゼネシス・アラビア社を設立
2005年1月	塩山工場において、品質保証国際規格ISO9001の認証の取得
2005年1月	資本金を14億56万円に増資（第三者割当による割当29,334株）
2006年3月	東京支店において、品質保証国際規格ISO9001の認証の取得
2007年8月	クウェートに合弁会社ゼネシス・クウェート社を設立
2007年11月	温度差発電研究・開発センター、伊万里工場完成（佐賀県伊万里市）
2008年8月	タヒチ（仏領ポリネシア）にXenesys Pacific Research & Services社を設立
2008年9月	東京支店を本店登記
2010年5月	本店を東京都港区より東京都品川区へ移転
2010年12月	株式会社ポスコ（POSCO）及びPOSCO JAPAN株式会社と資本提携
2011年7月	本店を東京都品川区より東京都中央区へ移転
2016年2月	株式会社JCサービスと資本提携
2016年11月	本店を東京都中央区より東京都港区へ移転
2018年8月	栄鋼管株式会社と資本提携
2018年9月	本店を東京都港区より東京都江東区へ移転
2019年3月	本店を東京都江東区より佐賀県伊万里市へ移転、本社を東京都江東区に開設

里見産業㈱は、2001年10月1日にオーシーフーズ神戸㈱が社名変更したものであります。

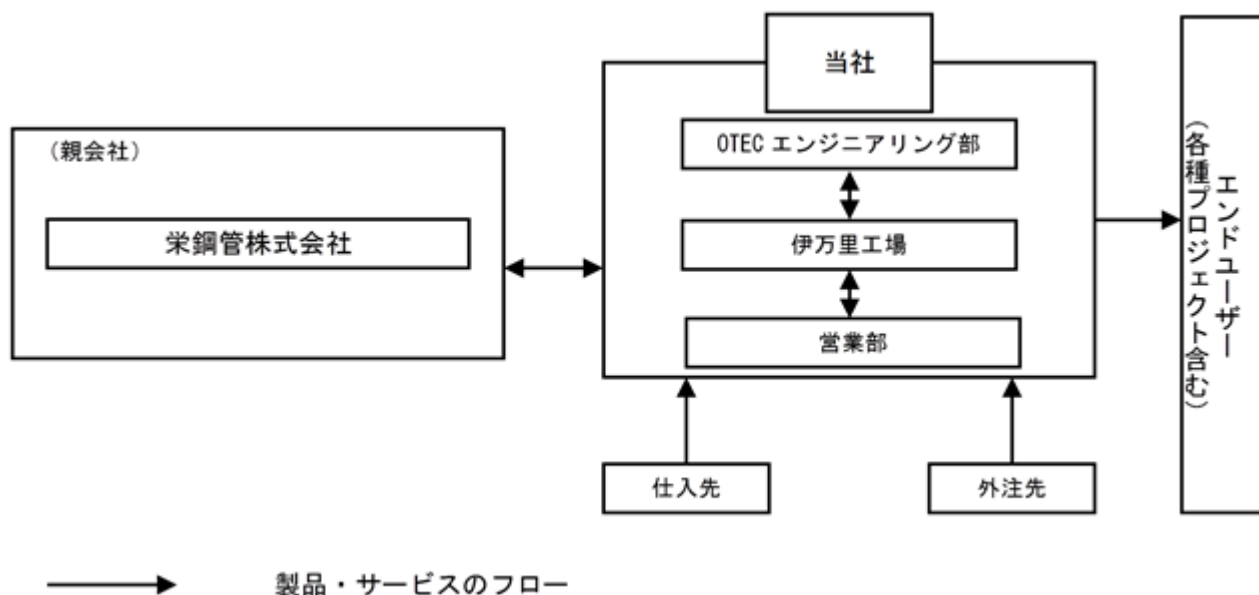
3【事業の内容】

当社は、「エネルギーと水」事業に専念する会社であります。事業内容は、海洋温度差発電（OTEC：Ocean Thermal Energy Conversion）、排熱温度差発電（DTEC：Discharged Thermal Energy Conversion）、温泉水温度差発電（STEC：Spring Thermal Energy Conversion）等の温度差発電装置、温度差エネルギーを利用した海水淡水化装置及び高性能2相式プレート式熱交換器等の開発、製造、販売並びにこれらを活用した各種サービスの提供を行っております。

この中で、栄鋼管株式会社の協力を得て、今後の成長戦略につなげるべく営業活動を行っております。なお、当事業年度において、当社が営んでいる事業の内容に重要な変更はありません。

当社の事業系統図は次のとおりであります。

（事業系統図）



4【関係会社の状況】

名称	所在地	資本金 又は出資金	主要な事業の内容	議決権の所有 (又は被所有) 割合(%)	関係内容
(親会社) 栄鋼管株式会社 (注)	東京都 江東区	4,000万円	鋼管製品専業商社	(被所有) 15.6	

(注) 支配力基準で親会社となっております。

5【従業員の状況】

(1) 提出会社の状況

(2018年12月31日現在)

従業員数	平均年齢	平均勤続年数	平均年間給与
20名	43.7歳	8年10か月	3,741千円

- (注) 1 社外から当社への出向者はありません。
2 平均年間給与には、基準外賃金を含んでおります。
3 当社は単一セグメントであるため、セグメント別に従業員数を記載していません。

(2) 労働組合の状況

労働組合は結成されておませんが、労使関係は円満に推移しております。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

当社は、2004年3月期以降連続して営業損失を計上しております。当該状況により、将来にわたって事業活動を継続するとの前提に重要な疑義を生じさせるような事象または状況が存在しております。

当該事象等を解消し、または改善するための収益性向上策は、以下のとおりであります。

当社の中核技術である海洋温度差発電システムに関しては、佐賀大学海洋エネルギー研究センターの指導のもと技術開発を進めるとともに、プロジェクトの具体化を目指した推進体制づくりや、それを活用した関係機関への働きかけを行ってきています。

産学で海洋温度差発電を推進していくことを目的とするOTECジャパンコンソーシアム（OTEC-JC：2015年8月設立：当社、ジャパン マリンユナイテッド株式会社、株式会社神戸製鋼所、横河ソリューションサービス株式会社、佐賀大学）、「久米島モデル」実現を主目的とする（一社）国際海洋資源エネルギー利活用推進コンソーシアム（産学官連携。2014年7月設立。事務局：久米島町及び当社）の2つを核に、協力してプロジェクト実現に向けた活動を継続していきます。

2019年度より開始されるSATREPSプログラムによるマレーシアでのOTECの開発を通し、OTECの最適地の一つである東南アジアでのプロジェクトの具体化に向け、佐賀大学、マレーシア工科大学、マレーシアの参加企業等と連携し、関連機関への働きかけを行っていきます。

また、今後計画されている海外を主体としたOTEC案件への対応体制を強化していく必要があり、人材の育成はもろん収益状況を見通しながら人材の強化、確保に努めていきます。

熱交換器の販売は当社の安定した事業運営のためには不可欠な事業となっております。熱交換器販売につきまして、現在ようやく多くの案件をかかえるようになりましたが、これらを収益に結び付けていくためには、様々な事業分野での様々なニーズに対処的に対応を行い、お客様のご理解と納得感を得るような進め方、展開が欠かせません。このためにはお客様の立場に立った構造と機能の分かりやすい技術資料、実績データに裏付けられた成功事例等を営業資料として整備し、提携、連携企業とも共有し、熱意と謙虚さを日々忘れず、受注の拡大を図っていきます。

大手企業に対する熱交換器の営業窓口は大きく二つに分けられ、一つは熱交換器の運転管理に係る設備部門、もう一つはプロセス全体を見ている設計やエンジニアリングなどの技術部門になります。設備部門からの引合いは更新案件が主となるため、比較的短納期の案件が多くなりますが単発的で契約金額もあまり大きくならないケースが多くなります。一方で技術部門からの引合いは将来的な生産合理化や大規模な省エネに関する技術開発を目的としているケースが多いことから、採用決定までには検討時間を要する傾向にはありますが、ひとたび設計的にスペックインされれば技術の水平展開によるリピートオーダーが期待できるほか、熱交換器の一契約あたりの金額も大きくなる傾向にあります。

XPプレートも少しずつではありますが現場での使用実績が増えるとともに、ユーザー様からの満足感も広がりつつありますので、これを足掛かりに設計エンジニアリング部門への営業を強化してまいります。

また受注拡大に伴い、近い将来生産体制の増強も必要となってくることから、量産に向けた製造技術の開発や生産体制の効率化についても検討を行い着実に準備を進めてまいります。

このように今後、営業拡大により業容の拡大が進むこととなりますが、これを推進していくためにもマーケットインに徹した人材の強化、確保に努めることに加え、案件ごとの収支管理、企業としての収益管理を確立、強化することが必要であり、ガバナンス強化のための組織作り、業務基準の見直し検討を行ってまいります。

しかし、現状においては上記の収益性向上策が順調に進むが不透明であることに加え、資金支援体制も確立していないことから、現時点では継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる状況となっております。

2【事業等のリスク】

以下において、当社の事業展開その他に関するリスク要因となる可能性があると考えられる主な事項について記載しております。

なお、文中において将来に関する事項が含まれておりますが、当該事項は有価証券報告書提出日現在において当社が判断したものであります。

(1) 継続企業の前提に関する重要事象等

当社は、2004年3月期以降連続して営業損失を計上しております。また、営業活動によるキャッシュ・フローについても、マイナスが継続しております。当該状況により、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような状況が存在しております。

当社は、当該状況を解消または改善すべく、以下 から の収益性向上策及び の資金調達に取り組んでおります。

各種実証プロジェクトへの参画により、確実な収益獲得を図っております。

積極的な営業活動の実施により、熱交換器販売の受注増を図っております。

製造体制の効率化を進め、製造原価の低減を図っております。

主要株主等から15,000千円の借入を2019年3月を目途に計画している他、必要に応じて2019年12月までに100,000千円程度の追加借入（純額）を計画しています。

しかし、上記の から の収益性向上策が順調に進むか不透明であることに加え、 の資金調達についても主要株主等の最終的な意思表明が行われていないため、現時点では継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められます。

なお、財務諸表は継続企業を前提として作成されており、継続企業の前提に関する重要な不確実性の影響を財務諸表に反映しておりません。

(2) 人材の獲得及び育成について

当社は効率的な組織作りに注力しておりますが、いかに主体性と積極性を併せ持った優秀な人材を獲得・育成していくかが今後の事業戦略を推進していく上で重要であります。質の高い高度な専門性を有する人材の獲得が急務となっておりますが、エネルギー事業業界においてはその確保は容易ではありません。人材の確保・育成が不首尾な場合は、今後の事業展開に支障をきたす可能性があります。

(3) キャッシュ・フローの状況の大きな変動について

当社のキャッシュ・フローが悪化したのは、営業活動が活発性を欠き見込み客の発掘がしっかりできていなかったことから契約が成立せず売上計上ができなかったことが主因で、引続きそれが継続することも懸念されます。さらに、受注したとしても事業の性格上、代金回収には時間がかかるリスクがあります。これらにより、キャッシュ・フローが悪化する事態も予測され、原材料仕入・研究開発等の運転資金及び設備投資資金等に資金不足を生ずる可能性があります。このような状況が継続した場合、当社の業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 原材料価格及び調達について

当社は各種温度差発電及び海水淡水化装置等の製品を取り扱っていますが、その中核的装置である全溶接プレート式熱交換器は自社製作をしております。その材料は純チタンであり、全量を(株)神戸製鋼所から調達しております。チタンは国際市況商品であり、常に価格変動リスクを伴います。良質のチタンは生産地、生産量とも非常に限定されており、需給関係により大きく価格が変動します。今後、チタンの世界需要の半分を占める航空機向け需要の拡大が見込まれ、世界的に深刻なチタン不足が生じ、価格が高騰する可能性もあります。その場合には当社の調達及び生産に支障をきたすおそれがあり、経営に影響を与える可能性があります。

(5) 製品開発に関する情報について

当社は各種の温度差発電及び海水淡水化装置等の中核的装置である全溶接プレート式熱交換器を自社で製作しています。現在、その大型化の開発に取り組んでいますが、その製品化には多くの専門要員の確保が必要であり、高度な技術と多額の費用がかかります。それが実現できるかどうかのリスクと、開発コストの回収リスクがあります。

(6) 開発技術及び特許等について

当社の研究開発は、エンジニアリンググループと伊万里工場において、温度差発電システムを中核とした自然エネルギー及び海水の淡水化など各分野にわたって研究開発に取り組んでおります。現在の研究開発は、海洋温度差発電（OTEC）、排熱温度差発電（DTEC）、海水淡水化システム（OTED：Ocean Thermal Energy Desalination）、プレート式熱交換器等の開発を行っております。

当社社員が成した発明考案については、「発明考案取扱規程」によってその取扱いを定めており、それによって管理運営しております。他社と共同の研究開発等では、その着手にあたり、共同行為に関する契約書を締結し、研究開発の分担、費用の分担、権利の帰属、研究成果の実施、第三者への譲渡、秘密の保持等の事項の取り決めを行っており、事後において問題が発生しないよう対処しております。

しかしながら、これらの研究開発全てが経営成績の向上に貢献できるとは限らず、多額の研究開発費及び人件費等が経営成績に影響を与える可能性があります。

なお、当社は自社開発の開発技術のほかに、佐賀大学が保有する特許権の専用実施権を取得しております。その契約期間はほとんどが特許満了日までとなっており、特許期間が満了するまでに、その特許を使用して成果をあげなければならないリスクがあります。さらに、この特許権の専用実施権の権利の侵害リスクを防ぐため、日本以外のアメリカ、ヨーロッパ、中国などでも登録しておりますが、万全とは言えません。

(7) 法的規制等について

当社の事業は、発電装置や淡水化装置の製造、販売を行っており、各種の法的規制を受けます。発電設備や淡水化装置の製造に関しては、「電気事業法」「労働安全衛生法」「消防法」「騒音防止法」等の規制を受け、設備の運転やそこから産出される電気、水等に関しては、「電気事業法」「水道法」「水質汚濁防止法」「大気汚染防止法」「悪臭防止法」等の法的規制を受けます。さらに、設備の建設に関しては、「建設業法」「労働安全衛生法」「廃棄物取締法」等の規制を受けます。

現在までのところ、当社はこうした関連法令等を遵守して事業展開を行っておりますが、これらの法的規制が見直された場合には、事業展開に影響を受ける可能性があります。

(8) 為替の変動

当社は、中東、アジア、太平洋島嶼国等での受注を目指しており、基本的には現地通貨建て取引がベースとなります。一方、製品装置の製造は伊万里工場で行われているため、当社コストが円建てとなり、通貨ニーズに差異が生じた場合には為替の変動により、プロジェクトの業績に影響を受ける可能性があります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

経営成績等の概要

(1) 財政状態及び経営成績

当社を取り巻く状況として、当社事業の柱となる海洋温度差発電については2018年5月閣議決定された第3期海洋基本計画において離島における海洋深層水を活用した産業の振興、再生可能エネルギーの利用促進が位置づけられることになり、海洋温度差発電と係わりの深い施策も関係省庁で数多く掲げられるようになりました。

一方、海外においても1MWの海洋温度差発電事業の実現を目指した動きが出て来ており、国内外において海洋温度差発電事業の実現に向けた気運は高まりつつあります。

また、地球環境問題から産業界において大企業をはじめ、排熱利用を主体とした省エネルギー推進のニーズは事業性、環境性向上のニーズも合わせ拡大しつつあり、優れた熱交換器に対する関心と期待は高まってきております。

そのような状況の中、海洋温度差発電については、マレーシアにおけるプロジェクトが採択され、熱交換器についても大型の引合いが昨年秋以降から増加しつつありますが、当事業年度の業績としましては売上高は55,490千円と大幅に低迷しており、営業損失は187,756千円、経常損失は185,779千円、当期純損失は191,802千円となりました。

売上高の主な内訳としては、沖縄県における海洋深層水の利用高度化に向けた発電利用実証事業と発電後海水の高度複合利用実証事業を合わせて26,303千円、また三洋化成工業株式会社子会社の熱交換器販売において9,922千円を計上しております。

当社の安定した事業展開のためには、熱交換器の販売が不可欠であり、市場のニーズに応えるべく営業を展開した結果、4基を納入し、19,072千円の売上を計上しております。

今後、排熱の有効な利活用に広く多く貢献をし、お客様の事業に確りとお役に立つという信念のもと、熱意と積極性をもってエンジニアリング力を高めた提案型営業活動を推進して行くとともに、当社の熱交換器を評価していただける外部企業との提携・連携強化を図り、営業活動体制を拡充することにより受注の拡大に取り組んでまいります。

(2) キャッシュ・フローの状況

当事業年度における現金及び現金同等物は5,671千円となり、前事業年度と比べて49,595千円の資金減少となりました。

当事業年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動の結果減少した資金は96,394千円(前事業年度は141,634千円の資金減少)となりました。これは主に、税引前当期純損失が191,215千円となり、たな卸資産が42,823千円減少したこと等によるものであります。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果使用した資金は8,201千円(前事業年度は増減なし)となりました。これは主に、有形固定資産の取得による支出4,455千円や、敷金及び保証金の差入による支出2,560千円等によるものであります。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果得られた資金は55,000千円（前事業年度は149,410千円の増加）となりました。これは主に、短期借入金の返済による支出が25,600千円となった一方で、短期借入れによる収入が55,600千円、長期借入れによる収入が25,000千円となったことによるものであります。

生産、受注及び販売の状況

(1) 生産実績

事業別	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)	
	金額(千円)	前年同期比(%)
エネルギー事業	96,208	45.0
合計	96,208	45.0

- (注) 1 金額は、工事原価によっております。
2 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(2) 受注実績

事業別	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)			
	受注高		受注残高	
	金額(千円)	前年同期比(%)	金額(千円)	前年同期比(%)
エネルギー事業	63,376	94.7	38,974	115.9
合計	63,376	94.7	38,974	115.9

- (注) 1 金額は販売価額によっております。
2 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(3) 販売実績

販売実績

事業別	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)	前年同期比(%)
	金額(千円)	金額(千円)	
エネルギー事業	163,458	55,490	33.9
合計	163,458	55,490	33.9

- (注) 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

主要顧客別売上状況

相手先	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)		当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)	
	金額(千円)	総販売実績に対する割合(%)	金額(千円)	総販売実績に対する割合(%)
沖縄県	57,921	35.4	26,303	47.4
NSスチレンモノマー株式会社	56,880	34.8	-	-
サンノブコ株式会社	-	-	9,922	17.8
JFE商事株式会社	-	-	6,450	11.6

- (注) 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析

当社における財政状態及び経営成績の分析は、以下のとおりであります。

(1) 財政状況の分析

(流動資産)

当事業年度末における流動資産の残高は、67,916千円となり123,434千円の減少となりました。減少要因としては、主に未成工事支出金が32,177千円減少したことによるものであります。

(固定資産)

当事業年度末における固定資産の残高は、13,603千円となり1,806千円の増加となりました。

固定資産の主な増加要因は敷金及び補償金が1,806千円増加したことによるものであります。

(流動負債)

当事業年度末における流動負債の残高は、55,583千円となり45,174千円の増加となりました。主な増加要因は、短期借入金が30,000千円増加したことによるものであります。

(固定負債)

当事業年度末における固定負債の残高は、25,000千円となり25,000千円の増加となりました。これは、長期借入金が25,000千円増加したことによるものであります。

(純資産)

当事業年度末における純資産の残高は、936千円となりました。

繰越利益剰余金は当期純損失191,802千円を計上し、792,573千円となりました。

(2) 経営成績の分析

当事業年度の売上高は55,490千円となり前年同期と比べ107,967千円の減収となりました。販売費及び一般管理費については、147,038千円(前年同期比74,270千円増加)を計上しております。この結果、営業損失は187,756千円(前年同期比64,885千円減益)、経常損失は185,779千円(前年同期比59,857千円減益)、当期純損失191,802千円(前年同期比65,294千円減益)となりました。また、当期キャッシュ・フローの現金及び現金同等物増減額は49,595千円の減少となりました。

(3) 重要事象等について

「2 事業等のリスク」の「(1) 継続企業の前提に関する重要事象等」に記載のとおり、当社は、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象または状況が存在しております。

当該重要事象等を解消し、または改善するため同項に記載のとおり取り組んでおります。

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5 【研究開発活動】

当事業年度における当社が支出した研究開発費の総額は8,679千円であります。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当事業年度の設備投資額の総額は5,641千円であります。

当社は報告セグメントを単一のセグメントとしておりますので、セグメント情報に関連付けた記載を行っておりません。

2【主要な設備の状況】

2018年12月31日現在における各事業所の設備、投下資本並びに従業員の配置状況は、次のとおりであります。

当社は報告セグメントを単一のセグメントとしておりますので、セグメント情報に関連付けた記載を行っておりません。

事業所名 (所在地)	設備の内容	帳簿価額(千円)						従業員数 (人)
		建物及び 構築物	機械及 び装置	車両 運搬具	工具、 器具及び 備品	土地 (面積㎡)	合計	
本店 (東京都江東区)	販売設備	-	-	-	-	- (-)	-	9
伊万里工場 (佐賀県伊万里市)	研究・生産設備	-	-	-	-	- (-)	-	11

(注) 1 金額は帳簿価額であり、消費税等を含めております(但し、第15期より消費税等の会計処理を税込方式から税抜方式へ変更したため、第15期以降に取得した有形固定資産についての消費税等は含まれておりません)。また、建設仮勘定は含んでおりません。

2 帳簿価額は、減損損失計上後の金額であります。

3 建物賃貸借契約による主な賃借設備は、次のとおりであります。

事業所名	貸主	年間賃借料	賃借面積(㎡)
本店	田中商事株式会社	800千円	149.62
伊万里工場	佐賀県	2,528千円	24,933.87

3【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設等

重要な設備の新設等の計画はありません。

(2) 重要な設備の除却等

重要な設備の除却等の計画はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	4,480,000
計	4,480,000

(注) 当社の株式を譲渡又は取得するには取締役会の承認を受けなければならない旨を定款に定めております。

【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (2018年12月31日)	提出日現在発行数(株) (2019年3月29日)	上場金融商品取引所名又は登録認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	3,475,644	3,475,644	-	(注) 1、2
計	3,475,644	3,475,644	-	-

(注) 1 当社は単元株制度を採用していないため、単元株数数をございませぬ。

2 株式の譲渡制限に関する事項は次のとおりです。

当社の発行する全部の株式について、会社法第107条第1項第1号に定める内容(いわゆる譲渡制限)を定めており、当該株式の譲渡について取締役会の承認を要する旨を定款において定めております。

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

なお、2008年6月27日開催の第20期定時株主総会決議に基づいて発行されたストックオプションは、2018年6月26日付にて行使期間満了により失効しております。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高 (千円)
2015年5月8日	-	1,301,731	390,000	100,000	-	-
2017年6月12日	2,173,913	3,475,644	100,000	200,000	99,999	99,999

(注) 1 2015年3月19日開催の定時株主総会において、欠損填補により資本金を390百万円減少することを決議し、効力発生日である2015年5月8日に手続きを行っております。

2 2017年5月22日開催の取締役会において、第三者割当により資本金を100百万円、資本準備金を99百万円増加することを決議し、効力発生日である2017年6月12日に手続きを行っております。

(5) 【所有者別状況】

(2018年12月31日現在)

区分	株式の状況							計
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人そ の他	
					個人以外	個人		
株主数(人)	-	-	2	24	3	5	1,218	1,252
所有株式数(株)	-	-	11,000	686,266	6,800	4,690	2,766,888	3,475,644
所有株式数の割合(%)	-	-	0.3	19.7	0.2	0.1	79.6	100.0

(注) 自己株式4,000株は、「個人その他」に含まれております。

(6) 【大株主の状況】

(2018年12月31日現在)

氏名又は名称	住所	所有株式数 (株)	発行済株式(自己 株式を除く。)の 総数に対する所有 株式数の割合(%)
齊藤 栄一	千葉県市川市	2,011,043	57.9
栄鋼管株式会社	東京都江東区亀戸7-11-17	543,478	15.6
佐々木 修	東京都世田谷区	94,448	2.7
長屋 勝	神奈川県鎌倉市	72,696	2.1
POSCO JAPAN株式会社	東京都中央区銀座5-11-14	65,100	1.9
株式会社エムズバンテック	群馬県邑楽郡邑楽町赤堀1508-4	60,818	1.7
諸井 猛	栃木県足利市	38,500	1.1
里見 潤	兵庫県明石市	32,002	0.9
里見 恒平	千葉県千葉市中央区	32,002	0.9
里見 まき	兵庫県明石市	32,001	0.9
山崎 かな	東京都国分寺市	32,001	0.9
計	-	3,014,089	86.8

(7) 【議決権の状況】
【発行済株式】

(2018年12月31日現在)

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 4,000	-	権利内容に何ら限定のない 当社における標準となる株 式
完全議決権株式(その他)	普通株式 3,471,644	3,471,644	同上
発行済株式総数	3,475,644	-	-
総株主の議決権	-	3,471,644	-

【自己株式等】

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数(株)	他人名義所有株式数(株)	所有株式数の合計(株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
株式会社ゼネシス	佐賀県伊万里市 黒川町塩屋字 七ツ島5番地91	4,000	-	4,000	0.1
計		4,000	-	4,000	0.1

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 普通株式

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

該当事項はありません。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額 (円)	株式数(株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
残存受権株式の総数及び価額の総額	-	-	-	-
その他(-)	-	-	-	-
保有自己株式数	4,000	-	4,000	-

3【配当政策】

当社の剰余金の配当政策は、期末配当の年1回を基本方針としております。

当社は、エネルギーと水を主たる事業分野としており、株主に対する長期的かつ総合的な利益の拡大を重要な経営目標と位置付けております。事業拡大の成果である株主価値の向上で応えられるよう最大限の努力を行い、配当に関しては中長期計画に基づく事業拡大と財政状態、利益水準を総合的に勘案して検討する所存ではありますが、現在の当社の状況を鑑みて、収益改善、手元資金の充実および財務体質の強化を最優先課題と判断し、無配とさせていただきます。

なお、配当を行う場合はその決定を株主総会で行います。

4【株価の推移】

当社株式は非上場でありますので、該当事項はありません。

5【役員の状況】

男性4名 女性0名（役員のうち女性の比率0%）

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (株)
代表取締役 社長	-	長屋 勝	1944年5月1日生	1968年4月 1997年7月 2002年4月 2007年4月 2012年3月 2012年10月 2018年3月 2018年8月	東京ガス株式会社 東京ガス株式会社 理事 都市エネルギー事業部長 株式会社エネルギーアドバンス設立 常務取締役 株式会社E.Iエンジニアリング 顧問 株式会社JCサービス 株式会社JCサービス 取締役 当社代表取締役社長（現任） 株式会社JCサービス 常務取締役 および取締役 辞任 退社	(注) 1	72,696
取締役	-	渡邊 太郎	1955年11月6日生	2002年11月 2003年4月 2003年10月 2007年10月 2008年4月 2011年7月 2015年3月	当社入社、エネルギー事業本部生産部長 当社Uプレート事業部部長 当社取締役Uプレート事業部部長 当社取締役X Pプレート事業部部長 当社伊万里工場長 当社専務執行役員 伊万里工場長 当社取締役（現任）	(注) 1	230
取締役	-	諸井 猛	1960年8月23日生	1993年8月 2007年6月 2012年7月	株式会社エムズバンテック設立 同社代表取締役（現任） 当社取締役（現任） 株式会社Auto Roma設立とともに代表取締役 （現任）	(注) 1	38,500
監査役	-	松崎 和則	1943年6月26日生	1996年9月 2003年6月	株式会社松和設立とともに代表取締役社長 （現任） 当社監査役（現任）	(注) 2	4,550
計							115,976

- (注) 1 取締役の任期は、2018年12月期に係る定時株主総会終結の時から2019年12月期に係る定時株主総会終結の時
までであります。
取締役 諸井猛は、社外取締役であります。
- 2 監査役の任期は、2018年12月期に係る定時株主総会終結の時から2022年12月期に係る定時株主総会終結の時
までであります。

6【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1)【コーポレート・ガバナンスの状況】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、経営の透明性の向上とコンプライアンス遵守の経営を徹底し、企業価値の最大化を図りながら、環境変化に即応できる経営体制を整えていきます。

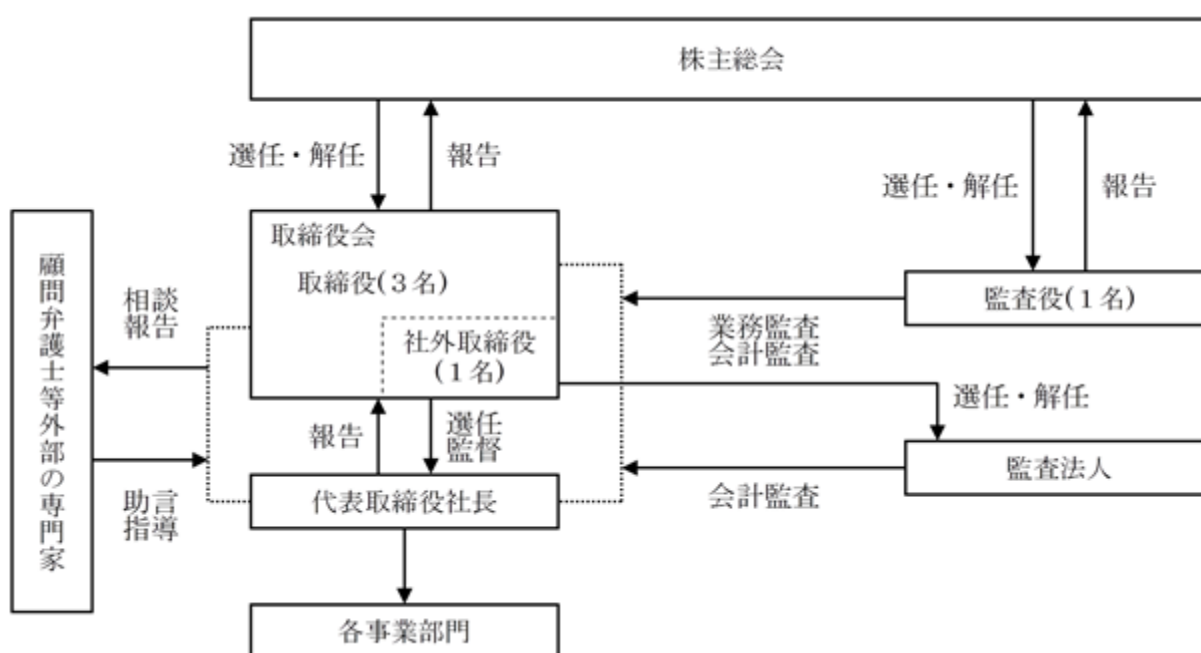
会社の機関の内容及び内部統制システムの整備の状況

イ 会社の機関の基本説明

会社の機関としては、株主総会、取締役会を中心に、それぞれの機関の本来の機能が十分に発揮できるように努めております。取締役会は取締役3名（うち社外取締役1名）で構成され、会社の運営・管理は、取締役会において選出された代表取締役とこれを補佐する社内取締役が行います。また、監査役も会社法第383条に基づき出席しています。また、従業員による日常の業務活動は、内部統制の充実により、社内規程やISO9001基準などによって権限・責任を明確化し、その遵守に心掛けております。

代表取締役は、このような体制において行われた業務執行の状況を、原則として月1回取締役会を開催して詳細に報告を行っています。

ロ 会社の機関・内部統制の関係を分かりやすく示す図表（2019年3月29日現在）



ハ 内部統制システムの整備状況と企業IR活動の取組

当社は、積極的に内部統制の充実に取り組んでおり、各種の規程を整備し、全社員に「諸規程集」を配布してその遵守を徹底しています。さらに、2005年1月より伊万里工場においてISO9001の認証を取得し、それに準拠した事業活動を展開しています。

なお、ホームページにおいて当社の会社概要と活動状況をタイムリーに開示しておりますが、具体的な営業活動等は機会をとらえ新聞、雑誌等を通じて、株主の皆様にお伝えするよう努めております。

ニ 内部監査及び監査役監査の状況

当社は、特に内部監査組織を設置してはおりませんが、各部門の相互牽制を行い適正な業務遂行が確保されるよう内部統制を構築中であります。監査役は1名おり、その監査役は取締役会その他重要な会議に出席するほか、取締役等から営業の報告を聴取し、重要な書類を閲覧し、業務及び財産の状況を調査しております。

ホ 会計監査の状況

仁智監査法人と監査契約を締結しており、会計監査の体制は次のとおりであります。

(イ) 業務を執行した公認会計士の氏名

指定社員 業務執行社員 山口 高志

指定社員 業務執行社員 内藤 泰一

なお、継続監査年数については、全員7年以内であるため、記載を省略しております。

(ロ) 監査業務に係る補助者の構成

公認会計士 4名

その他 1名

ヘ 社外取締役との関係

当社の社外取締役は諸井猛であります。諸井猛は当社の株式を38,500株保有しております。会社との取引関係及びその他の利害関係はありません。

リスク管理体制の整備の状況

当社は、リスク管理を経営の最重要課題として位置付けております。当社のリスク管理体制は、取締役会を毎月1回の定時及び必要に応じて随時に開催し、業務の推進を図っています。重要な固定資産・その他財産の取得及び処分や、重要な借入・債務保証・担保権設定・投融資には取締役会の決議を要することにしてあります。それ以外については、稟議制度を設けて稟議に付すこととしています。なお、各種の法律上の問題につきましては顧問弁護士に必要に応じて相談し、アドバイスを受けています。特許関係については顧問弁理士、社会保険労務関係は顧問社会保険労務士に必要に応じてそれぞれアドバイスを受けています。

役員報酬の内容

取締役及び監査役の年間報酬総額

取締役	2名	16,474千円（社外取締役1名は無報酬）
監査役	1名	240千円
合計		16,714千円

取締役の定数

当社の取締役は15名以内とする旨を定款で定めております。

取締役の選任

当社は、取締役の選任決議について、議決権の行使できる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を定款で定めております。

株主総会の特別決議の要件

当社は、会社法第309条第2項に定める決議について、定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うため、議決権を行使できる株主の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款で定めております。

(2) 【監査報酬の内容等】

【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

前事業年度		当事業年度	
監査証明業務に基づく報酬 (千円)	非監査業務に基づく報酬 (千円)	監査証明業務に基づく報酬 (千円)	非監査業務に基づく報酬 (千円)
8,000	-	8,000	-

【その他重要な報酬の内容】

該当事項はありません。

【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

該当事項はありません。

【監査報酬の決定方針】

該当事項はありません。

第5【経理の状況】

- 1 財務諸表の作成方法について
当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（1963年大蔵省令第59号）に基づき、同規則及び「建設業法施行規則」（1949年建設省令第14号）により作成しております。
- 2 監査証明について
当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、当事業年度（2018年1月1日から2018年12月31日まで）の財務諸表については仁智監査法人により監査を受けております。
- 3 連結財務諸表について
当社は、子会社を有していないため、連結財務諸表を作成しておりません。
- 4 財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて
当社は、以下のとおり財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。
会計基準等の内容を適切に把握できる体制を整備するため、会計基準等の変更等についての的確に対応することができるよう、研修への参加等を行っております。

1【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	55,267	5,671
完成工事未収入金	46,276	13,631
原材料	14,972	4,235
未成工事支出金	2 67,396	2 35,218
貯蔵品	1,250	1,342
前払費用	1,929	1,390
その他	4,257	6,425
流動資産合計	191,351	67,916
固定資産		
有形固定資産		
建物	290,273	294,013
減価償却累計額	1 290,273	1 294,013
建物(純額)	3 -	3 -
構築物	60,347	60,347
減価償却累計額	1 60,347	1 60,347
構築物(純額)	-	-
機械及び装置	638,933	638,933
減価償却累計額	1 638,933	1 638,933
機械及び装置(純額)	3 -	3 -
車両運搬具	2,566	2,566
減価償却累計額	1 2,566	1 2,566
車両運搬具(純額)	3 -	3 -
工具、器具及び備品	344,494	345,341
減価償却累計額	1 344,494	1 345,341
工具、器具及び備品(純額)	3 -	3 -
有形固定資産合計	-	-
投資その他の資産		
敷金及び保証金	11,797	13,603
投資その他の資産合計	11,797	13,603
固定資産合計	11,797	13,603
資産合計	203,148	81,520

(単位：千円)

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
負債の部		
流動負債		
工事未払金	1,911	3,751
株主、役員又は従業員からの短期借入金	3 -	3 30,000
未払金	797	8,077
未払費用	3,452	5,347
未払法人税等	3,846	2,679
未成工事受入金	-	4,877
預り金	402	745
工事損失引当金	-	104
流動負債合計	10,409	55,583
固定負債		
株主、役員又は従業員からの長期借入金	3 -	3 25,000
固定負債合計	-	25,000
負債合計	10,409	80,583
純資産の部		
株主資本		
資本金	200,000	200,000
資本剰余金		
資本準備金	99,999	99,999
その他資本剰余金	232,566	232,566
資本剰余金合計	332,566	332,566
利益剰余金		
利益準備金	1,944	1,944
その他利益剰余金		
別途積立金	260,000	260,000
繰越利益剰余金	600,771	792,573
利益剰余金合計	338,827	530,629
自己株式	1,000	1,000
株主資本合計	192,739	936
純資産合計	192,739	936
負債純資産合計	203,148	81,520

【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
売上高		
完成工事高	163,458	55,490
売上原価		
完成工事原価	3,4 213,561	3,4 96,208
完成工事総損失()	50,102	40,718
販売費及び一般管理費	1,2 72,768	1,2 147,038
営業損失()	122,870	187,756
営業外収益		
受取利息	1,467	1,934
為替差益	0	-
雑収入	428	85
営業外収益合計	1,895	2,020
営業外費用		
支払利息	2,340	41
為替差損	-	0
株式交付費	2,589	-
雑損失	16	1
営業外費用合計	4,946	42
経常損失()	125,921	185,779
特別損失		
減損損失	-	5,436
特別損失合計	-	5,436
税引前当期純損失()	125,921	191,215
法人税、住民税及び事業税	586	586
法人税等合計	586	586
当期純損失()	126,507	191,802

【完成工事原価報告書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)		当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)	
		金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)
材料費		17,711	8.3	16,688	17.3
労務費		68,891	32.3	40,753	42.4
外注加工費		97,425	45.6	15,462	16.1
経費		29,532	13.8	23,304	24.2
完成工事原価		213,561	100.0	96,208	100.0

(注) 原価計算の方法は、個別原価計算によっております。

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2017年1月1日 至 2017年12月31日）

（単位：千円）

	株主資本			
	資本金	資本剰余金		
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計
当期首残高	100,000	-	232,566	232,566
当期変動額				
新株の発行	100,000	99,999		99,999
当期純損失（ ）				
当期変動額合計	100,000	99,999	-	99,999
当期末残高	200,000	99,999	232,566	332,566

	株主資本						純資産合計
	利益剰余金				自己株式	株主資本合計	
	利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金合計			
		別途積立金	繰越利益剰余金				
当期首残高	1,944	260,000	474,263	212,319	1,000	119,246	119,246
当期変動額							
新株の発行						199,999	199,999
当期純損失（ ）			126,507	126,507		126,507	126,507
当期変動額合計	-	-	126,507	126,507	-	73,492	73,492
当期末残高	1,944	260,000	600,771	338,827	1,000	192,739	192,739

当事業年度（自 2018年1月1日 至 2018年12月31日）

（単位：千円）

	株主資本			
	資本金	資本剰余金		
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計
当期首残高	200,000	99,999	232,566	332,566
当期変動額				
新株の発行				
当期純損失（ ）				
当期変動額合計	-	-	-	-
当期末残高	200,000	99,999	232,566	332,566

	株主資本						純資産合計
	利益剰余金				自己株式	株主資本合計	
	利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金合計			
		別途積立金	繰越利益剰余金				
当期首残高	1,944	260,000	600,771	338,827	1,000	192,739	192,739
当期変動額							
新株の発行							
当期純損失（ ）			191,802	191,802		191,802	191,802
当期変動額合計	-	-	191,802	191,802	-	191,802	191,802
当期末残高	1,944	260,000	792,573	530,629	1,000	936	936

【キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税引前当期純損失()	125,921	191,215
減価償却費	-	204
減損損失	-	5,436
工事損失引当金の増減額(は減少)	-	104
株式交付費	2,589	-
受取利息及び受取配当金	1,467	1,934
支払利息	2,340	41
為替差損益(は益)	0	0
売上債権の増減額(は増加)	34,776	32,644
たな卸資産の増減額(は増加)	42,966	42,823
仕入債務の増減額(は減少)	13,288	1,839
立替金の増減額(は増加)	631	-
前払費用の増減額(は増加)	288	539
未払金の増減額(は減少)	4,017	7,279
未払費用の増減額(は減少)	864	1,895
未収消費税等の増減額(は増加)	386	1,925
未払消費税等の増減額(は減少)	3,320	-
その他	4,394	5,023
小計	140,198	97,242
利息及び配当金の受取額	1,467	1,934
利息の支払額	2,340	500
法人税等の支払額	562	586
営業活動によるキャッシュ・フロー	141,634	96,394
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	-	4,455
無形固定資産の取得による支出	-	1,186
敷金及び保証金の差入による支出	-	2,560
短期貸付けによる支出	35,000	65,000
短期貸付金の回収による収入	35,000	65,000
投資活動によるキャッシュ・フロー	-	8,201
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入れによる収入	85,000	55,600
短期借入金の返済による支出	133,000	25,600
長期借入れによる収入	-	25,000
株式の発行による収入	197,410	-
財務活動によるキャッシュ・フロー	149,410	55,000
現金及び現金同等物に係る換算差額	0	0
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	7,776	49,595
現金及び現金同等物の期首残高	47,490	55,267
現金及び現金同等物の期末残高	55,267	104,862

【注記事項】

（継続企業の前提に関する事項）

当社は、2004年3月期以降連続して営業損失を計上しております。また、営業活動によるキャッシュ・フローについても、マイナスが継続しております。当該状況により、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような状況が存在しております。

当社は、当該状況を解消または改善すべく、以下からの収益性向上策及びの資金調達に取り組んでおります。

各種実証プロジェクトへの参画により、確実な収益獲得を図っております。

積極的な営業活動の実施により、熱交換器販売の受注増を図っております。

製造体制の効率化を進め、製造原価の低減を図っております。

主要株主等から15,000千円の借入を2019年3月を目途に計画している他、必要に応じて2019年12月までに100,000千円程度の追加借入（純額）を計画しています。

しかし、上記のからの収益性向上策が順調に進むか不透明であることに加え、の資金調達についても主要株主等の最終的な意思表示が行われていないため、現時点では継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められます。

なお、財務諸表は継続企業を前提として作成されており、継続企業の前提に関する重要な不確実性の影響を財務諸表に反映しておりません。

（重要な会計方針）

1 有価証券の評価基準及び評価方法

その他有価証券

時価のないもの

総平均法による原価法

2 たな卸資産の評価基準及び評価方法

通常の販売目的で保有するたな卸資産

評価基準は原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法）によっております。

(1) 原材料

.....移動平均法

(2) 未成工事支出金

.....個別法

(3) 貯蔵品

.....最終仕入原価法

3 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

定額法を採用しております。

主な耐用年数

建物 : 3年～31年

構築物 : 3年～11年

機械及び装置 : 2年～11年

車両運搬具 : 2年～4年

工具、器具及び備品 : 2年～11年

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

特許実施権 :

定額法（8年）を採用しております。

ソフトウェア（自社利用） :

社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法を採用しております。

水道施設利用権 :

定額法（15年）を採用しております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとする定額法によっております。

- 4 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準
外貨建金銭債権債務は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。
- 5 引当金の計上基準
- (1) 貸倒引当金
債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。
なお、当事業年度においては、貸倒実績がなく、また貸倒懸念債権等もないため、貸倒引当金を計上しておりません。
- (2) 工事損失引当金
事業年度末の手持工事のうち損失の発生が見込まれるものについて、将来の損失に備えるため、その損失見込額を計上しております。

6 完成工事高及び完成工事原価の計上基準

完成工事高の計上は、当事業年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事については工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を、その他の工事については工事完成基準を適用しております。

7 キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクを負わない取得日から3か月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

8 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

（貸借対照表関係）

1 有形固定資産の減損損失累計額について、貸借対照表上、減価償却累計額に含めて表示しております。

2 たな卸資産及び工事損失引当金の表示

損失の発生が見込まれる工事契約に係るたな卸資産は、これに対応する工事損失引当金を相殺して表示しております。

相殺表示したたな卸資産に対応する工事損失引当金の額

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
未成工事支出金	2,599千円	1,497千円
合計	2,599千円	1,497千円

3 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
建物	-	-
機械及び装置	-	-
車両運搬具	-	-
工具、器具及び備品	-	-
特許権	-	-
合計	-	-

担保付債務は次のとおりであります。

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
株主、役員又は従業員からの短期借入金	-	10,000千円
株主、役員又は従業員からの長期借入金	-	25,000千円
合計	-	35,000千円

(損益計算書関係)

- 1 販売費に属する費用のおおよその割合は1.4%(前事業年度1.0%)、一般管理費に属する費用のおおよその割合は98.6%(前事業年度99.0%)であります。
主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
役員報酬	14,012千円	16,714千円
給料手当	9,922千円	9,586千円
旅費交通費	4,443千円	5,763千円
支払報酬	10,325千円	11,574千円
教育研修費	-千円	40,777千円
製品保証費	-千円	24,033千円

2 研究開発費の総額

	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
	-千円	8,679千円

3 完成工事原価に含まれている工事損失引当金繰入額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
	2,599千円	104千円

4 期末たな卸高は収益性の低下による簿価切下後の金額であり、次のたな卸資産評価損が完成工事原価に含まれております。

	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
	11,991千円	45,791千円

(株主資本等変動計算書関係)

前事業年度(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当事業年度期首	増加	減少	当事業年度末
普通株式(株)	1,301,731	2,173,913	-	3,475,644

(変動事由の概要)

第三者割当増資による増加 2,173,913株

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当事業年度期首	増加	減少	当事業年度末
普通株式(株)	4,000	-	-	4,000

3 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4 配当に関する事項

該当事項はありません。

当事業年度(自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当事業年度期首	増加	減少	当事業年度末
普通株式(株)	3,475,644	-	-	3,475,644

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当事業年度期首	増加	減少	当事業年度末
普通株式(株)	4,000	-	-	4,000

3 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4 配当に関する事項

該当事項はありません。

(キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
現金及び預金勘定	55,267千円	5,671千円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	-	-
現金及び現金同等物	55,267千円	5,671千円

(リース取引関係)

該当事項はありません。

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社は、営業活動や研究開発等に必要な資金を主に親会社等からの短期ならびに長期借入により調達しております。投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である完成工事未収入金は、顧客の信用リスクに晒されております。また、グローバルに事業を展開していることから生じている外貨建ての営業債権は、為替の変動リスクに晒されています。

営業債務である工事未払金は、1年以内の支払期日であります。

また、現時点ではデリバティブ取引は、行っておりません。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク(取引先の契約不履行等に係るリスク)の管理

当社は、債権管理規程に従い、営業債権について、管理部門である総務部において主要な取引先の状況を取引相手ごとに期日及び残高を管理するとともに、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。

当事業年度の決算日現在における最大信用リスク額は、信用リスクに晒される金融資産の貸借対照表価額により表わされています。

市場リスク(為替や金利等の変動リスク)の管理

当社は、外貨建ての営業債権債務について、通貨別月別に把握された為替の変動リスクに対して、原則として取引の規模に応じて為替予約を利用してヘッジする方針ですが、現在は為替予約によるヘッジは行っておりません。

資金調達に係る流動性リスク(支払期日に支払いを実行できなくなるリスク)の管理

当社は、各部署からの報告に基づき営業・管理グループが適時に資金繰計画を作成・更新し、流動性リスクを管理しております。

2 金融商品の時価等に関する事項

貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含めておりません（（注2）を参照ください。）。

前事業年度（2017年12月31日）

（単位：千円）

	貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 現金及び預金	55,267	55,267	-
(2) 完成工事未収入金	46,276	46,276	-
資産計	101,544	101,544	-
(1) 工事未払金	1,911	1,911	-
(2) 株主、役員又は従業員からの短期借入金	-	-	-
(3) 未払金	797	797	-
(4) 未払費用	3,452	3,452	-
(5) 株主、役員又は従業員からの長期借入金	-	-	-
負債計	6,161	6,161	-

当事業年度（2018年12月31日）

（単位：千円）

	貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 現金及び預金	5,671	5,671	-
(2) 完成工事未収入金	13,631	13,631	-
資産計	19,303	19,303	-
(1) 工事未払金	3,751	3,751	-
(2) 株主、役員又は従業員からの短期借入金	30,000	30,000	-
(3) 未払金	8,077	8,077	-
(4) 未払費用	5,347	5,347	-
(5) 株主、役員又は従業員からの長期借入金	25,000	25,119	119
負債計	72,176	72,295	119

（注1）金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資産

(1) 現金及び預金 (2) 完成工事未収入金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

負債

(1) 工事未払金 (2) 株主、役員又は従業員からの短期借入金 (3) 未払金 (4) 未払費用

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(5) 株主、役員又は従業員からの長期借入金

これらの時価については、元利金の合計額を、新規に同様の借入を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の貸借対照表計上額

(単位：千円)

区分	2017年12月31日	2018年12月31日
敷金及び保証金	11,797	13,603

上記については市場価格がなく、時価を把握する事が極めて困難と認められる金融商品であります。

(注3) 金銭債権の決算日後の償還予定額

前事業年度(2017年12月31日)

(単位：千円)

	1年以内	1年超5年以内	5年超
現金及び預金	55,267	-	-
完成工事未収入金	46,276	-	-
合計	101,544	-	-

当事業年度(2018年12月31日)

(単位：千円)

	1年以内	1年超5年以内	5年超
現金及び預金	5,671	-	-
完成工事未収入金	13,631	-	-
合計	19,303	-	-

(注4) その他の有利子負債の決算日後の返済予定額

前事業年度(2017年12月31日)

(単位：千円)

	1年以内	1年超5年以内	5年超
株主、役員又は従業員からの短期借入金	-	-	-
株主、役員又は従業員からの長期借入金	-	-	-
合計	-	-	-

当事業年度(2018年12月31日)

(単位：千円)

	1年以内	1年超5年以内	5年超
株主、役員又は従業員からの短期借入金	30,000	-	-
株主、役員又は従業員からの長期借入金	-	25,000	-
合計	30,000	25,000	-

(退職給付関係)

当社には、退職金制度がありませんので該当事項はありません。

(ストック・オプション等関係)

1 スtock・オプションの内容、規模及びその変動状況

(1) スtock・オプションの内容

回数	第12回 ストック・ オプション
付与対象者の区分及び人数	当社取締役 2名 当社従業員 18名
株式の種類及び付与数	普通株式 1,900株
付与日	2008年6月27日
権利確定条件	新株予約権の行使時において、当社の取締役、監査役、顧問もしくは従業員たる地位にある事を要します。ただし、取締役会の承認がある場合はこの限りではありません。
対象勤務期間	対象勤務期間の定めはありません。
権利行使期間	2010年6月28日 ~ 2018年6月26日

(2) スtock・オプションの規模及びその変動状況

当事業年度(2018年度12月期)において存在したストック・オプションを対象とし、ストック・オプションの数については、株式数に換算して記載しております。

ストック・オプションの数

	第12回 ストック・ オプション
権利確定前(株)	
前事業年度末	
付与	
失効	
権利確定	
未確定残	
権利確定後(株)	
前事業年度末	1,900
権利確定	
権利行使	
失効	1,900
未行使残	

単価情報

		第12回 ストック・ オプション
権利行使価格	(円)	30,000
行使時平均株価	(円)	
公正な評価単価 (付与日)	(円)	

2 スtock・オプションの権利確定数の見積方法

基本的には、将来の失効数の合理的な見積は困難であるため、実績の失効数のみ反映させる方法を採用しております。

(税効果会計関係)

(1) 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
繰延税金資産		
税務上の繰越欠損金	575,609千円	484,095千円
減損損失	63,666千円	58,357千円
棚卸資産評価損	9,569千円	24,414千円
その他関係会社有価証券評価損	3,185千円	3,185千円
その他	3,120千円	2,943千円
繰延税金資産小計	655,151千円	572,996千円
評価性引当額	655,151千円	572,996千円
繰延税金資産合計	-	-

(2) 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

前事業年度及び当事業年度においては、税引前当期純損失を計上しているため、記載を省略しております。

(資産除去債務関係)

当社は、不動産賃貸借契約に基づき使用する工場用地において、退去時における原状回復費用等に係る債務を有しておりますが、当該資産除去債務に関しては、資産除去債務の負債計上に代えて、不動産賃貸借契約に関する敷金及び保証金の回収が最終的に見込めないと認められる金額を合理的に見積もり、そのうち当事業年度の負担に属する金額を費用計上する方法によっております。

(セグメント情報等)

当社の事業セグメントは「エネルギー事業」のみの単一セグメントであり重要性が乏しいため、セグメント情報の記載を省略しております。

【関連情報】

前事業年度(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

1 製品及びサービスごとの情報

(単位:千円)

	実証事業	調査・開発受託	製品販売	合計
外部顧客への売上高	56,271	22,964	84,223	163,458

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

有形固定資産の所在が日本国内のみでございますので、該当事項はありません。

3 主要な顧客ごとの情報

顧客の名称又は氏名	売上高(千円)	関連するセグメント名
沖縄県	57,921	エネルギー事業
NSスチレンモノマー株式会社	56,880	エネルギー事業

当事業年度(自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)

1 製品及びサービスごとの情報

(単位:千円)

	実証事業	調査・開発受託	製品販売	合計
外部顧客への売上高	26,303	10,115	19,072	55,490

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

有形固定資産の所在が日本国内のみでございますので、該当事項はありません。

3 主要な顧客ごとの情報

顧客の名称又は氏名	売上高(千円)	関連するセグメント名
沖縄県	26,303	エネルギー事業
サンノブコ株式会社	9,922	エネルギー事業
JFE商事株式会社	6,450	エネルギー事業

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前事業年度(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

当社の事業は単一セグメントであることから、記載を省略しております。

当事業年度(自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)

当社の事業は単一セグメントであることから、記載を省略しております。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】
該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1 関連当事者との取引

財務諸表提出会社と関連当事者の取引

財務諸表提出会社の親会社及び親会社の関連機関

前事業年度（自 2017年1月1日 至 2017年12月31日）

親会社及び主要株主（会社の場合に限る）等

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金	事業の内容又は職業	議決権等の所有（被所有）割合（%）	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額（千円）	科目	期末残高（千円）
親会社	㈱JCサービス	大阪府大阪市	2億7,315万円	再生可能エネルギーに関する開発ビジネス	（被所有） 直接 57.9	役員の兼任 資金の借入 資金の返済 資金の貸付 資金の回収 増資の引受 賃料の支払 利息の支払 利息の受取	資金の借入（注2）	85,000	-	-
							資金の返済	85,000	-	-
							資金の貸付（注2）	35,000	-	-
							資金の回収	35,000	-	-
							増資の引受（注4）	129,999	-	-
							賃料の支払（注3）	7,979	-	-
							利息の支払	2,340	-	-
利息の受取	1,467	-	-							
主要株主	栄鋼管㈱	東京都江東区	4,000万円	各種鋼管の加工・販売	（被所有） 直接 15.7	増資の引受	増資の引受（注4）	49,999	-	-

（注）1 上記の金額のうち、取引金額には消費税等が含まれておりません。

2 資金の借入・貸付については、市場金利を勘案して利率を合理的に決定しております。

3 事務所の賃借の取引条件については、市場実情を勘案し協議のうえで決定しております。

4 当社が行った第三者割当増資を1株につき92円で引き受けたものであります。

役員及び主要株主（個人の場合に限る）等

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金	事業の内容又は職業	議決権等の所有（被所有）割合（%）	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額（千円）	科目	期末残高（千円）
役員	中久保正己	-	-	当社代表取締役会長	（被所有） 直接 3.1	-	増資の引受（注2）	10,000	-	-
							資金の返済（注3）	46,000	-	-
役員及びその近親者が議決権の過半数を所有している会社（当該会社の子会社を含む）	㈱エムズバンテック	群馬県邑楽郡	80,000千円	各種素材・鋼材の加工	（被所有） 直接 1.8	増資の引受	増資の引受（注2）	5,000	-	-

（注）1 上記の金額のうち、取引金額には消費税等が含まれておりません。

2 当社が行った第三者割当増資を1株につき92円で引き受けたものであります。

3 利息は無利息であります。

当事業年度（自 2018年1月1日 至 2018年12月31日）

親会社及び主要株主（会社の場合に限る）等

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金	事業の内容又は職業	議決権等の所有（被所有）割合（％）	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額（千円）	科目	期末残高（千円）
親会社 （注1）	株JC サービス	大阪府大阪市	2億7,315万円	再生可能エネルギーに関する開発ビジネス	（被所有） 直接 57.9	役員の兼任 資金の貸付 資金の回収 原状回復費の立替	資金の貸付（注3）	65,000	-	-
							資金の回収	65,000	-	-
							原状回復費の立替	-	その他流動資産	1,756
親会社 （注1）	栄鋼管(株)	東京都江東区	4,000万円	各種鋼管の加工・販売	（被所有） 直接 15.6	譲渡担保契約並びに特許権質権設定契約の締結	資金貸付の前提となる担保の提供	-	-	-

- （注）1 株式会社JCサービスは2018年8月31日付でその保有株式全てを齊藤栄一氏に譲渡しており、同日より栄鋼管株式会社が、その代表取締役社長齊藤栄一氏の持株分と合わせ当社の親会社であります。
- 2 上記の金額のうち、取引金額と期末残高には消費税を含めておりません。
- 3 資金の貸付については、市場金利を勘案して利率を合理的に決定しております。

役員及び主要株主（個人の場合に限る）等

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金	事業の内容又は職業	議決権等の所有（被所有）割合（％）	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額（千円）	科目	期末残高（千円）
主要株主	齊藤栄一	-	-	栄鋼管株式会社 代表取締役	（被所有） 直接 57.9	資金の借入 譲渡担保契約並びに特許権質権設定契約の締結	資金の借入	25,000	株主、役員又は従業員からの長期借入金	25,000
							資金の借入	10,000	株主、役員又は従業員からの短期借入金	10,000
							資金貸付の前提となる担保の提供	-	-	-
役員	長屋 勝	-	-	当社 代表取締役	（被所有） 直接 2.1	資金の借入	資金の借入	45,600	株主、役員又は従業員からの短期借入金	20,000
							資金の返済	25,600		

- （注）1 上記の金額のうち、取引金額と期末残高には消費税等が含まれておりません。
- 2 齊藤栄一氏からの借入金については市場金利を勘案して利率を合理的に決定しております。
- 3 長屋勝氏からの借入金については無利息です。

2 親会社又は重要な関連会社に関する注記

(1) 親会社情報

栄鋼管株式会社 （非上場）

(2) 重要な関連会社の要約財務情報

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
1株当たり純資産額	55円52銭	0円26銭
1株当たり当期純損失()	49円30銭	55円24銭

(注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式は存在するものの1株当たり当期純損失であるため、記載しておりません。

2 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
純資産の部の合計額(千円)	192,739	936
純資産の部の合計額から控除する金額(千円)	-	-
普通株式に係る期末の純資産額(千円)	192,739	936
普通株式の発行済株式数(株)	3,475,644	3,475,644
普通株式の自己株式数(株)	4,000	4,000
1株当たり純資産額の算定に用いられた普通株式の数(株)	3,471,644	3,471,644

3 1株当たり当期純損失の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
当期純損失()(千円)	126,507	191,802
普通株主に帰属しない金額(千円)	-	-
普通株式に係る当期純損失()(千円)	126,507	191,802
普通株式の期中平均株式数(株)	2,565,847	3,471,644
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定に含めなかった潜在株式の概要	新株予約権1種類(新株予約権の数1,900個)。新株予約権の概要は「第4 提出会社の状況、1 株式等の状況、(2)新株予約権等の状況」に記載のとおりです。	新株予約権1種類(新株予約権の数1,900個)。 なお、権利行使期間終了に伴う権利失効により当期事業年度末残高はありません。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有価証券明細表】

該当事項はありません。

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期末残高 (千円)	当期末減価 償却累計額 及び減損損 失累計額又 は償却累計 額 (千円)	当期償却額 (千円)	差引当期末 残高 (千円)
有形固定資産							
建物	290,273	3,740	-	294,013	294,013 (172,189)	124	-
構築物	60,347	-	-	60,347	60,347 (10,575)	-	-
機械及び装置	638,933	-	-	638,933	638,933 (46,416)	-	-
車両運搬具	2,566	-	-	2,566	2,566 (0)	-	-
工具、器具及び備品	344,494	846	-	345,341	345,341 (3,309)	79	-
有形固定資産合計	1,336,616	4,586	-	1,341,203	1,341,203 (232,492)	204	-

(注) 当期末減価償却累計額及び減損損失累計額又は償却累計額のうち()内は内書きで減損損失の計上額であります。

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
株主、役員又は従業員からの短期借入金	-	30,000	1.6	-
株主、役員又は従業員からの長期借入金 (1年以内に返済予定のものを除く)	-	25,000	5	2020年
合計	-	55,000	-	-

(注) 1 「平均利率」については、借入金等の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。

2 株主、役員又は従業員からの長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く)の貸借対照表日後5年以内における1年ごとの返済予定額の総額

区分	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
株主、役員又は従業員からの長期借入金	25,000	-	-	-

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (目的使用) (千円)	当期減少額 (その他) (千円)	当期末残高 (千円)
工事損失引当金	-	104	-	-	104

【資産除去債務明細表】

該当事項はありません。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

現金及び預金

区分	金額(千円)
現金	123
預金	
普通預金	5,547
計	5,547
合計	5,671

完成工事未収入金

相手先	金額(千円)
サンノブコ株式会社	10,715
サンエル商事株式会社	2,916
合計	13,631

完成工事未収入金の発生及び回収並びに滞留状況

当期首残高 (千円)	当期発生高 (千円)	当期回収高 (千円)	当期末残高 (千円)	回収率(%)	滞留期間(日)
(A)	(B)	(C)	(D)	$\frac{(C)}{(A) + (B)} \times 100$	$\frac{(A) + (D)}{2} - (B)$ 365
46,276	51,233	83,878	13,631	86.0	213.4

(注) 消費税等の会計処理は、税抜方式を採用しておりますが、上記金額には消費税等が含まれております。

未成工事支出金

期首残高(千円)	当期支出額(千円)	完成工事原価への振替額 (千円)	期末残高(千円)
67,396	136,896	169,074	35,218

(注) 期末残高の内訳は次のとおりであります。

期末残高内訳	金額(千円)
材料費	9,333
労務費	46,048
外注費	6,114
経費	21,529
工事損失引当金	47,807
合計	35,218

原材料

品名	金額(千円)
チタン材	-
ステンレス材	4,235
合計	4,235

貯蔵品

品名	金額(千円)
カタログ	154
チタンスクラップ品	1,156
その他	31
合計	1,342

敷金及び保証金

相手先	金額(千円)
佐賀県	11,183
その他	2,420
合計	13,603

工事未払金

相手先	金額(千円)
有限会社新日東工業	1,086
株式会社アカシ精機	847
その他	1,816
合計	3,751

未払金

相手先	金額(千円)
給料手当	3,388
旅費交通費	2,217
その他	2,470
合計	8,077

未払費用

相手先	金額(千円)
社会保険料	3,064
その他	2,283
合計	5,347

未成工事受入金

相手先	金額(千円)
株式会社神戸製鋼所	4,877
合計	4,877

(3)【その他】

(1) 決算日後の状況

特記事項はありません。

(2) 重要な訴訟事件等

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	1月1日から12月31日まで
定時株主総会	3月中
基準日	12月31日
株券の種類	株券不発行制度導入（2004年12月22日臨時株主総会決議）
剰余金の配当の基準日	12月31日
1単元の株式数	-
株式の名義書換え	
取扱場所	東京都千代田区神田錦町三丁目11番地 東京証券代行株式会社
株主名簿管理人	東京都千代田区神田錦町三丁目11番地 東京証券代行株式会社
取次所	東京証券代行株式会社 本店及び各取次所
名義書換手数料	無料
新券交付手数料	無料
公告掲載方法	官報
株主に対する特典	該当事項はありません。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は上場会社ではありませんので、金融商品取引法第24条の7第1項の適用がありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類

事業年度 第30期（自 2017年1月1日 至 2017年12月31日）

2018年3月30日関東財務局長に提出。

(2) 半期報告書

事業年度 第31期中（自 2018年1月1日 至 2018年6月30日）

2018年9月28日関東財務局長に提出。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書

2019年3月28日

株式会社ゼネシス

取締役会 御中

仁智監査法人

指 定 社 員 公認会計士 山口 高志 印
業 務 執 行 社 員

指 定 社 員 公認会計士 内藤 泰一 印
業 務 執 行 社 員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社ゼネシスの2018年1月1日から2018年12月31日までの第31期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、キャッシュ・フロー計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社ゼネシスの2018年12月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する事業年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

強調事項

注記事項（継続企業の前提に関する事項）に記載されているとおり、会社は2004年3月期以降連続して営業損失を計上し、また、営業活動によるキャッシュ・フローについても、マイナスが継続している状況にあり、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような状況が存在しており、現時点では継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる。なお、当該状況に対する対応策及び重要な不確実性が認められる理由については当該注記に記載されている。財務諸表は継続企業を前提として作成されており、このような重要な不確実性の影響は財務諸表に反映されていない。

当該事項は、当監査法人の意見に影響を及ぼすものではない。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
 - 2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。